

「健康と大規模災害—多次元リスクへのアプローチによるレジリエンス向上」を開催しました (2015/3/16)

テーマ：身体とこころの健康に留意した防災体制の構築
場所：東北大学 川内北キャンパス Room C102

3月16日(月)に第3回国連防災世界会議パブリックフォーラム「健康と大規模災害—多次元リスクへのアプローチによるレジリエンス向上」を開催しました。まず CDHAM センター長の Charles Beadling が、防災・減災、災害対応や復旧・復興に向けた取り組みの中で健康の問題は最も重要な要件の一つであるにも関わらず、健康への取り組みと防災への取り組みの相互の連携が乏しい現状にあり、このことが災害への社会全体での包括的な取り組みを妨げていることに繋がっていることを指摘した後、Geoffrey Oravec と Rebecca Chestnutt がアフリカにおけるエボラ感染症への取り組みの体験に基づき、その問題を分析しました。

引き続き、当研究所の富田博秋(災害医学研究部門 災害精神医学分野)が、2014年5月にワシントンDCの第3回 WCDRR に向けた災害保健シンポジウムの成果と第3回 WCDRR 後の災害メンタルヘルスと地域レジリエンス向上のに向けた次の10年間の取り組みをテーマに問題提起を行い、国立精神・神経医療研究センター・災害時こころの情報支援センター長・金吉晴が東日本大震災の教訓に基づく災害メンタルヘルスへの全国レベルでの取り組みについて、NTT 東日本関東病院・秋山剛が地域レジリエンス向上に向けた国際間連携に向けて話題提供を行いました。

会場には45名程(日本人10名、海外からの参加者35名)の参加者がおり、総合討論では、アフリカのエボラ感染症、東日本大震災をはじめとする世界の様々な被災地域での健康問題に取り組む専門家から、地域特性、コミュニケーション、人的・財政的資源など様々な観点からの討論が活発に行われ、今後、この問題での国際連携の重要性が確認されました。



会場の様子